

論 文

社会人入学した看護学生の入学体験 に関する記述的研究

— 臨床経験 1 年目における面接調査より —

多崎 恵子 (石川医療技術専門学校)

平松 知子 (金沢大学医学部保健学科)

The Descriptive Study of Nursing Education for Students who Returned the School after Working with Another Job

— Based on a Semi-Structured Interview with Two First Year Nurses —

Keiko Tasaki (Ishikawa School of Medical Technology)

Tomoko Hiramatsu (Department of Nursing School of Health Sciences, Kanazawa University)

Abstract

The purpose of this study was to clarify and understand frankly the meaning of experiences for students who changed their life direction from an unrelated job to a nursing field, and to consider appropriate educational approach for these students. The subjects were two nurses who had been working for 10 months after graduated from nursing school. The semi-structured interview was used to obtain information such as their needs, experiences, feelings, and so forth. The results revealed the following three things;

1. Two major components in being a nursing students: a goal which they made use of themselves and an experience which was affected by an age, a life experience and a personality. These two components consisted of four and six elements, respectively.
2. Their active attitudes toward learning was related to their own life goals and the contents that they learned deeply had relation with an experience; an age, a life experience and a personality.
3. The experience of working strongly contributed to their motivation of becoming a nurse and to support them during school years. These results indicated the importance of their working experiences and making use of their experiences in nursing practice.

Key Words

社会人入学した看護学生 (The nursing student who returned the school after working with another job)

体験の意味 (The meaning of experience as nursing student)

看護学教育のあり方 (What the nursing education ought to be)

要 旨

本研究の目的は、社会人入学した看護学生の体験の意味をあるがままにとらえ明確化すること、その資質を生かし伸ばすための看護教育はどうあるべきか考えることである。社会人入学生として学び、臨床経験 1 年目の A と B を対象に半構成的面接を行った。面接内容の記述、分析により、以下のことが明らかになった。

1. 社会人入学した 2 名の看護学生の体験に関する本質的な意味の単位は、《自己を生かしていくという目標》と《年齢・人生経験・性格に影響された体験》であり、それぞれ 4 要素、6 要素で構成された。
2. 学びの姿勢が意欲的であった要因は、自己を生かしていくという目標にあり、学びの内容を深めていけた要因は、年齢・人生経験・性格に影響された体験にあったと考えられた。
3. 人生経験を生かせるという側面が、社会人入学生よりどころになっていると考えられた。その部分を看護につなげて深めていくことの教育的効果が示唆された。

はじめに

筆者が勤務する看護専修学校は平成元年に開校以来、何名かの社会人入学生をうけ入れ、すでに数名を臨床に送り出している。今回、2名の社会人入学生が同学年に在籍中、教員として関わりをもつことができた。これらの学生は他の一般の学生と比べると、非常に意欲的で、学びを深めることができていると感じられた。しかし、この一般の学生との違いは、どのようなことに影響をうけていたのか明らかではなかった。教員自身が社会人入学生について、どのようなものなのかよく理解していない現状がある。

藤田¹⁾の報告によると、一度社会に出て、自分が本当にやりたかったことは何かという自問自答のプロセスを経た学生は、目的意識がしっかりしていると考察されている。また、一般的にも、社会人入学生は人生経験が豊富な分、学びを深めることができると考えられるが、一方では年齢が高いことによるハンディも予測される。青年期にある一般の看護学生の経験に関しては、杉森ら²⁾が看護基礎教育の期間に獲得されるであろう同一性形成に関わる研究を継続的に行っている。しかし、社会人入学した看護学生の体験に関しては、藤田¹⁾がその意識の実態の一部を簡単に報告しているにすぎない。また、社会人入学生の個々の事例をていねいに分析していく研究はまだなされていない。人間はひとりひとりが個別の存在であり、ひとくりにできない部分が多い。看護していくうえでも、看護者となる人を育てる教育においても、そのような個性を大切に、対象の体験の意味を深く掘り下げて考え、理解していくことが重要であると考えられる。

そこで、本研究の目的は、社会人入学生の体験の意味をあるがままにとらえ明確化すること、そして、その資質を生かし伸ばすための看護学教育はどうあるべきなのか考えることの2点である。

本研究において社会人入学した看護学生とは、一旦職業人として社会へ出、あるいは家庭をもち、いくらかの人生経験を経てから看護職を目指して、一般の学生と同様の入学試験を経て入学してくる学生のことと定義する。

対 象

3年課程のI看護専修学校に社会人入学、平成8年3月に卒業し、平成9年1月現在、看護職として臨床経験1年目（性格には10ヶ月目）のAとBである。この時期を選択した理由は、次の2点である。

1. 就職後10ヶ月経過すれば、職場や仕事にも慣

れ、3年間の看護学生としての体験を、ある程度余裕をもって、客観的に振り返ることができると考えた。

2. 卒業してからの間隔が長すぎると、学生時代のことを忘れてしまったり、学生時代と就職後の体験とを混同してしまったりする危険性が考えられる。

したがって、臨床経験10ヶ月目が最も適切とはいえないが、10ヶ月目であれば上記の2点を満たすことができると考えた。

方 法

1. 2名の対象者に対して、本研究の目的の説明と研究参加への依頼を行った。対象者が在学中、筆者の目からは2名とも他の一般の学生とは質的に異なったより深い学びを得ていたように感じられたが、実際には対象者自身にとってどのような体験だったのか、その意味を明確にしたいこと、また、教員は対象者にとってよき教育者たりえたのか考える機会としたいことを説明した。その結果、面接協力に対しての了解と承諾が得られた。

2. 面接方法

1) 半構成的面接を行った。面接質問項目は、藤田¹⁾と杉森ら²⁾の行ったものを参考にし作成した。準備した質問項目は、内容的に重なる部分もあるが、以下のとおりである。

- (1)看護の道を選んだ理由
- (2)入学するために苦労したこと
- (3)入学して戸惑ったこと
- (4)在学中に苦労したこと
- (5)年長者であることのメリット・デメリット
- (6)同級生や教員との関係のあり方
- (7)授業料や生活費などの経済面
- (8)看護学生時代を振り返り、よかったと思うこと
- (9)逆にもっとこんなふうにしたかった、してほしかったと思うこと
- (10)社会人入学について考えること
- (11)就職後、年長者であることのメリット・デメリット
- (12)今後携わっていきたい看護の領域・内容

2) 面接は1対1で1回ずつ行った。所要時間はそれぞれ90分間と60分間であった。

3) 面接中は、傾聴に心がけ、対象者が語った内容があるがままにうけとめるよう努めた。そして、その体験世界に共感し、対象者の立場に近づけるよう努力した。

4) 面接の経過は、本人の同意を得て、テープに録音し逐語録をおこした。

3. 分析方法

分析方法については、広瀬³⁾が使用したものを参考とし、以下の方法を作成した。

1) 逐語録の内容を何度も読み、全体の意味を把握した。

2) 全体の内容を、類似した大まかな内容毎に分類し、これを本質的な意味の単位とした。

3) それぞれの本質的な意味の単位が、さらにどのような内容から構成されているか分類し、これを構成要素とした。

4) 構成要素ごとに個々の体験を記述しながら、それらのネーミングが適切かどうか検証していった。

5) 分析の過程で、裏づけとなるデータが不明確な部分に関しては、在学中の行動観察のデータを用いた。

6) 経過中、質的研究を経験した本研究の研究者以外の人に、随時、記録を提示し指導を受け、分析の視点の偏りを最小限に留めた。

4. 研究期間は、平成9年1月から平成9年3月であった。

結 果

1. 2事例の背景

1) Aの場合

独身女性。30歳代。小学校の教員として主に障害児教育に携わっていた。控えめな性格でマイペース型。地元の総合病院に就職した。

2) Bの場合

家族は夫と大学生の子供1人。40歳代。看護学校の事務職を経て、病院で看護助手をしていた。明るくだれとでもうちとけやすい性格。もといいた病院へ就職した。

2. 分析結果

1) 全体の構造

社会人入学した看護学生の体験には、《自己を生かしていくという目標》と《年齢・人生経験・性格に影響された体験》という意味があった。

《自己を生かしていくという目標》は〈現行では満たされない欲求〉〈目標達成のための犠牲〉〈目標を成し遂げる意志〉〈成し遂げたことの意味づけ〉の4要素で構成された。《年齢・人生経験・性格に影響された体験》は、〈これまでの体験へ重ねる学び〉〈人生経験を生かせるというよりどころ〉〈年齢が高いがゆえの学び〉〈年齢へのこだわり〉〈目標や立場の共有者同志の支え〉〈体験の拡大に関連した性格〉の6要素で構成された。

2) 体験の具体的内容

(1) 《自己を生かしていくという目標》について

これは、看護という職業を通して、自己を生かしながら、自分の納得のいく生き方をしていきたいという目標である。2名の学生は、他の職業に就きながらもそのままでは満たされず、看護婦になるための勉強をし、看護職として自己を生かしていきたいと根強く希求していた。その目標達成のためには、社会的立場を捨て、経済的な負担を抱えながら、そのような犠牲を払ってまでも3年間頑張ろうとした。その頑張りとは、何としてでも看護婦の資格をとり、自分の納得のいく生き方をするという目標を成し遂げようとする強い意志があったからこそ可能であった。卒業し資格を取得できたことが最終目標達成ではないが、看護学生として3年間の学びを成し遂げたこととして意味づけをしている。資格取得以降が、これを活用し自己を生かしていくことのスタートであるといえる。

① 〈現行では満たされない欲求〉

Aは、弱い立場にある人を助けたいという思いから、障害児教育という職業に携わりながらも看護婦になることをあきらめきれなかった。Bは、両親を亡くしたとき何もしてあげられなかった悔いや、老人病院で働いているうちに積み重なってきた知識欲があった。これらの動機が〈現行では満たされない欲求〉として目標の根底を形成していると考えた。

② 〈目標達成のための犠牲〉

一方、両者とも一旦これまでの仕事を辞職し、経済性や社会的立場を捨てて看護学校に入学した。Aは、経済的負担や心配を家族に与えている。特にBは、受験期にある子供をかかえながらも家族を説き伏せて入試の準備をしたと述べている。両者とも家族の理解や協力を得なければ成し遂げられないことであった。このように〈目標達成のための犠牲〉を払っての3年間だったといえる。

③ 〈目標を成し遂げる意志〉

苦しく辛い勉強や実習だったが、「看護や医療のことが少しでも分かっていくのはうれしかった」「自分の人生の中で最も情熱をかけてやれることを優先したかった。生やさしさはなかった。くやしい思いもした。しかし、もういやだと思ふことはなかった」とそれぞれ述べているように、ある面で楽しみや喜びを感じながら頑張ることができている。これらは、〈目標を成し遂げる意志〉と意味づけることができた。

④ 〈成し遂げたことの意味づけ〉

また、2人とも、3年間を振り返り、「いい体験だった」「とても得をしている」と述べていることがか

表1 《自己を生かしていくという目標》の要素と具体的記述

要素 \ 事例	A	B
現行では満たされない欲求	弱い立場にある人を助けるような仕事があった。看護婦になりたかったが、家人のすすめで教員の道を選んでしまった。それでも主に障害児教育の方に携わり、弱い人を助けたい思いは何割かは満たされたが、ちょっと違うという思いもあった。看護の道へ進みたかったという思いから辞職を考えたが、周囲から反対され一度断念したことがある。しかしあきらめ切れず何年か後再度申し出、周囲の理解も得ることができた。	両親をガンで亡くしたとき、何をどうしてあげればいいのか分からなかった。もうちょっと知識があれば、何かできたのではないかと悔しい思いをした。また、看護助手として老人病院で働いていたとき、もっと老人を全体からみたい、知識がほしいと思った。
目標達成のための犠牲	小学校教員の仕事をやめた。経済面では家族に少し借りた。家族には、1年でも早く卒業してしっかり就職してほしいと言われた。働きながら4年間かけて学ぶ定時制の看護学校も考えたが、このこともあり3年課程の全日制を選んだ。	経済面では、姉がある程度援助してくれた。夫には、無収入になるが3年間我慢してほしいと頼んだ。大学受験を控えた子供もいたので無理ではないかと大分言われた。しかし、夫は説き伏せた。
目標を成し遂げる意志	小学校教員の仕事を辞めアルバイトをしながら、1年間看護学校受験の準備をした。入学してからは、自分がやりたいと思って選んだ道だったし、看護や医療のことが少しでも分かっていくのはうれしかった。楽しみや喜びがあった。苦しいハードな勉強や実習だったが、同級生と悩みを言い合いながら乗り越えることができた。	何が何でも入試をクリアしないと目標への第一歩が始まらないので必死だった。大学受験を控えた息子の助けを借りて、受験勉強を頑張った。家族には、年齢的にもう無理ではないとも言われたが、無理と言われれば言われるほど、やってみないと分からない、やらない先から諦めたくない思いだった。自分の人生の中で最も情熱をかけてやれることを優先したかった。3年間生やさしさはなく、くやしい思いもした。しかしもういやだと思うことはなかった。解剖学など記憶力の問われる基礎の科目では苦勞した。しかし、専門科目にはとても興味があったので、基礎科目ほど苦勞はなかった。
成し遂げたことの意味づけ	全体にいい経験だった。本当に3年間やれて、こういう体験ができてよかったと思う。	看護の考え方をしっかり学ぶことができた。この年代で、今の看護の考え方を学ぶことができ、とても得をしている。自分になかった視野があらゆる面から広がった。

ら、看護婦になるというとりあえずの目標を〈成し遂げたことの意味づけ〉をしていると考えた。

(2)《年齢・人生経験・性格に影響された体験》について

年齢が高いことにこだわりをもち、プレッシャーを感じたり気を使ったりすることによる影響もあるが、逆に年齢が高いからこそ、若い同級生たちの新しい考え方や行動が刺激となり影響をうけた体験であった。そして、これまでの豊富な人生経験を生かし、よりどころにしながら、看護学生としての専門的な学習や、若い同級生・教員・臨床指導者との関わりなど、新たな体験をこれまでの体験に重ねていくことができた。言葉を変えれば人生経験に影響された体験である。また、それだけではなく、個々のもつ特性(性格)によっても、その体験の内容が影響をうけていることが考えられた。したがって、年齢・人生経験・性格に影響された体験として意味づけた。

①〈これまでの体験へ重ねる学び〉

2名の学生は、それぞれ30歳代、40歳代の女性として社会的な役割をもって自立し、青年期の一般学

生には思いも及ばないような体験を経てきている。教育者として障害をもった弱い立場にある子供たちやその家族に関わってきた体験、看護助手として老人の日常生活や精神面をケアしてきた体験などは職業人としての体験である。「障害児教育は個人的にマイペースでやっていく仕事だが、看護していくうえではチームワークの大切さを学んだ」「看護は、人間を幅広くあらゆる側面からみなければならぬ奥深い職業である」と語っている。このように、人生経験を活用し、さらに学びを深めていくことを〈これまでの体験へ重ねる学び〉と意味づけた。

②〈人生経験を生かせるというよりどころ〉

「もう少し看護婦としての体験を積み、特に精神的な看護の部分で今までの人生経験が生かせ、自分の生き方を盛り込んだ看護をやっているだろう」「それなりの人生経験を積んできているので、若い子と比べれば少しは自分の体験を交えて老人をみることができる」と語っていることから、人生経験を生かせるという側面をよりどころとして、年長者である自分が看護学生として学ぶことを意味づけしてきたと考えた。このことを〈人生経験を生かせる

表2 《年齢・人生経験・性格に影響された体験》の要素と具体的記述(1)

要素 \ 事例	A	B
これまでの体験へ重ねる学び	中学・高校の部活では卓球・テニス・剣道などの個人競技をやってきた。障害児教育も個人でやっていく仕事であった。一般的に世界が狭くなる仕事といわれている。自分はマイペースでやってきた。看護婦はチームワークが大切である。みんなで協力していくことの大切さを学んだ。チームワークについて本当の意味ではじめて知ったのかもしれない。大学の講義は先生の熱心が少ない。仕事にも直接結びつかないように思った。専門学校は、教育の内容が仕事に直接結びついているのでいいと思う。中身も濃い。学生も先生も熱心に思えた。自分も教える立場をやってきたので、授業の準備など先生の大変さがよく分かる。	専門科目にはとても興味があったので、基礎科目ほど苦労しなかった。自分の興味のある老人看護に関しては、もう少し時間があってもいいような気がする。看護助手をしていたときは、今までの自分の主婦としての感覚で、患者さんのメンタルな部分と自分の生活経験からの面でしかみていなかった。看護は、人間をはばひろくあらゆる側面からみなければならない奥深い職業である。この年齢で看護を学ぶことにより、自分の中に全く知らなかった分野が新たに開け、視野が広がった。
人生経験を生かせるというよりどころ	就職後、外見は新人ナースに見えないので、患者さんが安心して任せてくれる部分がある。もう少し経験を積み、特に精神的な看護の部分で、今までの人生経験が生かされるだろう。自分の生き方を盛り込んだ看護をやっているだろう。性格も生かしているだろう。	それなりの人生経験を積んできているので、若い子と比べれば少しは自分の体験を交えて老人をみることができる。問題といわれる人に対しても、一歩下がってみる事ができる。
年齢が高いがゆえの学び	若い人たちの考え方・行動に触れ・よい刺激となった。	ベテランナースと同じ年代で、今の看護の考え方を学ぶことができとても幸せであり得をしていると思う。若い層から新しい発想や考え方を吸収でき得をした。恵まれていると思う。年代がいろいろあってこそ、見方・考え方の違いが学べ、看護を深めていくことができる。年齢が高いからハンディだという考え方は間違っていた。物事をプラス方向に変えていくことを学んだ。看護学校で若い人とのコミュニケーションのとり方が身に付いているので、若い人たちの多い職場だがすんなり入っている。

というよりどころ」と名づけた。

③ <年齢が高いがゆえの学び>

「若い人達の考え方・行動に触れ、よい刺激になった」「ベテランナースと同じ年代で、今の看護の考え方を学ぶことができ得をしている」などは <年齢が高いがゆえの学び> と考えた。

④ <年齢へのこだわり>

しかし、年齢が高いメリットばかりではなかった。年齢差の著しい同級生には、思ったよりスムーズに適応できているようであった。逆に、若い人たちの考え方がよい刺激となったと、プラス思考に変化している。しかし、記憶力の低下による学習効率の悪さについては、2人ともこだわりがみられた。また、Aは「先生には他の学生と同じように扱ってもらうことが一番うれしかった」、Bは「先生に一目おかれていたので想像以上に気を使った」と述べている。特にAは、性格的に引っ込み思案なので、思うように教員とコンタクトがとれなかった。しかも、だれとでもうちとけやすいBと違い、Aは自分が年上として若い子をまとめるなどの役割を果たせなかったことで、教員に悪いなと思っている。教員が気を使ったことが、逆に彼女たちに気を使わせていたこと

が分かった。また、卒業後、以前働いていた病院へ再就職したBには、年齢へのこだわりはほとんどなく、むしろ年齢が高いメリットが大きい。しかし、新たな職場に就職したAにとっては、依然として年齢へのこだわりは持続している。同時期に就職した若い新人スタッフに対しても、看護婦としては先輩である同年代のスタッフに対しても距離感を抱いている点においてである。以上、年長者であることのデメリットにこだわることを <年齢へのこだわり> とした。

⑤ <目的や立場の共有者同志の支え>

一方、お互いに、もし相手がいなかったらこの3年間は違っていただろうと述べている。お互いの存在が、精神的な支えであった。「何でも話せた」「学校での悩み、先生の教え方の批判などぶちまけて話し合った」とも語っている。これらは <目的や立場の共有者同志の支え> と意味づけた。

⑥ <体験の拡大に関連した性格>

30歳代、40歳代という年齢の違い、これまでの人生経験の違いなどが、AとBの体験世界の意味をそれぞれ異なったものとする要因となっている。しかしこれら以外にも、その根底にある性格がその体験

表3 《年齢・人生経験・性格に影響された体験》の要素と具体的記述(2)

要素 \ 事例	A	B
年齢へのこだわり	<p>入学前、受験校を決めるときに、年齢制限にひっかかることが多かった。4年制の働きながら学ぶ定時制の学校を受験した時、面接で体力的にかなりきついのが年齢的に大丈夫かと言われた。年がいつているので、少しでも早く卒業して定職について欲しいと親は希望したので3年課程の学校を選んだ。入学式の前に、テレビで他の看護学校の入学式を見た。40歳代の主婦・会社員からトラパーユした男性などがいて、とても励みになった。</p> <p>同級生について、最初皆自分のことをどういうふうに見ているかとても気になった。しかし、想像していたよりスムーズに適応できた。逆に若い人たちの考え方や行動に触れよ刺激となった。先生について、自分の方が年上ということは、あまり考えないようにした。他の学生と同じように扱ってもらえることが一番嬉しかった。自分が年上ということで先生が気を使っていたら、また自分はおねえさんの若い子をまとめられなかったので先生に悪いなと思ったことがある。学習面では、年齢が高い分、丸暗記ではすぐに忘れてしまうので意味づけして覚えるようにしたかったが、時間不足で思うようにいかなかった。臨床実習では、病棟スタッフが、若い子に対するより、よけいつつかかってきたり、警戒されたりなど、かまえているように思えた。就職後、若い子より人生経験が長い分、何もかも言わなくてもできるはずという上司の期待がプレッシャーである。また、新人だが、若い子といっしょではないし、同じような年齢の人は主任クラスなので立場が違う。どちらにも入り切れず中途半端でちょっとさみしい。</p>	<p>受験勉強は大変だった。大学受験を控えた子供の助けを借りたが、この年で無理ではないかともいわれた。入学後、記憶力の問われる学科には特に苦労した。</p> <p>自分の子供と同じ年頃の同級生と机を並べることについて、最初は無理にあわそうとしてしんどかった。地を出してやっていけばいいというのが分かると馴染めた。</p> <p>授業中、年齢が高いということで目立ち、注目された。うれしい面もあるがプレッシャーもあった。自分は学生なのに…と思った。教員に関しても、他の学生と違い、一目おかれていたの、想像以上に気を使った。よく目をかけてもらっていたとは思う。</p>
目標や立場の共有者同志の支え	<p>Bさんの存在は大きかった。ひとりだったら精神的な面で自分はまたちがっていたと思う。何でも話せたし、安心感があつた。</p>	<p>Aさんは支えであり、本当に助けられた。彼女がいなかったら、やめるまではいかないが、つらかったのではないと思う。学校でのまわりとのいろんなくいちがいが、悩み、先生の考え方の批評などぶちまけて話し合った。</p>
体験の拡大に関連した性格	<p>自分はすぐに人とうちとけられる方ではない。話しやすい先生となら、いろいろ話ができ、助けられたり励まされたりした。しかし、話しやすい先生以外には自分の方から積極的に接近していくことができなかった。思いはあつたができないまま終わった。せっかく臨床経験の豊富な先生がたくさんいたのに、いろいろききにいかずもったいなかつた。同級生に関しても、もっと大勢の子たちといろんな話をすればよかった。できない自分がはがゆかつた。入学後、感性を高めたり、いろんな人と接して自分の性格を広げたいと思いマンドリンを始めた。気分転換にもなりよかった。</p>	<p>性格が内向的ではないので、入学して2~3ヶ月で年下の同級生に馴染んでいった。最初のうちは、同級生との年代層の違いから、かなりプレッシャーもあったが、マイナス思考になってもどうにもならないと思った。今の現状を自分がエンジョイしていくことを考えた。若い人たちの考え方を直に吸収できたことは、自分にとってとても大事なことであり、勉強させられた。年齢が高いからハンディだという考え方は間違っていた。物事をプラス方向に変えていくことを学んだ</p> <p>《学生時代の行動観察より》</p> <p>クラスの中では母親的存在であった。大勢の同級生とあまり違和感もなく自然に関わり、いろいろな話をしてきた。教員に対しても自然な感じで気軽に声をかけてきてくれることがよくあつた。</p>

の意味を変化させる大きな要因と考えられ、〈体験の拡大に関連した性格〉と名づけた。内向的なAは、自分の性格を広げようとしながらも、「できない自分自身がはがゆかつた」と語っている。一方Bは、「年齢が高いからハンディだという考え方は間違っていた。物事をプラス方向に変えていくことを学んだ。若い人たちの考え方を直に吸収できたことは、自分にとってとても大事なことであり、勉強させられた

ことだった」と述べているように、次第に年齢へのこだわりから離れ、年齢が高いがゆえの学びの方へ目が向けられるようになってきていると考えた。これは、「内向的ではない」と自己評価し「今の現状を自分がエンジョイしていくことを考えた」Bの、だれとでもうちとけやすいプラス思考の性格がその要因のひとつと考えられた。

考 察

1. 社会人入学生が一般学生より意欲的で学びの内容を深めることができていた要因

両者とも看護婦になりたい思いが、現行では満たされない欲求として、目標の根底を形成する大きな動機となっていた。このことは、「一度社会に出て、自分が本当にやりたかったことは何かという自問自答のプロセスを経た学生は目的意識がしっかりしている」という藤田¹⁾の先行研究の考察に合致する。目的意識がしっかりしているがゆえに、厳しい学習や実習、厳しい経済的状况におかれても頑張れていると考える。彼女たちの学びの姿勢が意欲的であった要因は、自己を生かしていくという目標にあったと考えられた。

また、学びの内容を深める要因になっていたのは、年齢・人生経験・性格に影響された体験であったと考えられた。

2. 社会人入学した学生と青年期にある一般の学生との違い

青年期にある学生にとっては、自我同一性形成が心理・社会的発達課題である。したがって、看護学教育は、看護婦という職業人の育成という視点もさることながら、その土台ともいえる将来看護という職業に就く「人を育てる」という人間形成の側面を同様に重視すべきだと杉森²⁾は述べている。そして、青年期の対象者には、確固たる同一性形成を促し、職業的同一性を獲得しうる看護婦を養成するためには、学生の社会性の獲得という視点、すなわち学生が自由に課外活動を行い、自ら思考しうる教育のありかたを重視しなければならないと指摘している。また、青年期の学生にとっては、看護学の専門的な講義や実習が、自己の可能性と存在意義の発見をもたらしており、学生自身の人間としての側面に影響しているとも述べている。さらに、他者との相互行為による自己の否定的側面の受け入れや、偏見やあるべき論からの解放は同一性形成にとって不可欠な経験であるとの指摘もある。これらの青年期の学生が獲得していく経験は、すでに青年期を通過した2名の社会人入学生にとっては、過去に体験されていることであり、そういう意味では、すでに入学時より、一般の学生のスタート地点よりかなり先に進んでいたと考えることができる。したがって、彼女たちはこれまでの人生経験をよりどころとして、専門的な看護学の学習内容を余裕をもって深めていくことができたと考えられた。

また、青年期の学生にとっては、職業選択への試行錯誤という経験が自我同一性形成の上で重要なも

のであると杉森²⁾は指摘しているが、社会人入学生にとっては、自己を生かしていくという目標が揺るぎなく存在しているがゆえに、落ち着いて学習に取り組んでいたと考えられる。

3. 社会人入学した学生の資質を生かす看護学教育のあり方

社会人入学生には年齢へのこだわりがみられ、その中でも教員が気を使ったことで逆に彼女たちに気を使わせていたことが明らかになっている。実際、無意識的ではあれ、年齢が高いからという理由で、教員が彼女たちに過剰な期待をかけていなかったとは言いきれない。また、教員に気を使うこともあったか、彼女たちは自己をアピールしてくることもあまりなく、社会人入学生であるがゆえのさまざまな問題を抱えながら、目標や立場の共有者同志で支えあっていたことが明らかになっている。教員は、社会人入学生のこのような心理的状况を十分に把握し理解したうえで、学習しやすい環境を整えていくことが必要である。

さらに、社会人入学生にとって人生経験を生かせるという側面がよりどころとなっているとすれば、その側面を肯定し支えることで、彼女たちはより積極的に励み、さらに学びを深めていくことができると考えられる。彼女たちは教員に対して、自らの人生経験を積極的にアピールしてくることはあまりなかった。実際の教育の場で、彼女たちの豊富な体験を掘り起こし、看護につなげて考え方をふくらませるような活用の仕方が意識的になされていたとはいえない。一般の学生たちにとっても、このような活用の仕方がなされれば、学びを共有でき、教育的効果は大きいと考えられる。また、今回の調査では明らかではないが、社会人入学生の意欲的な姿勢や人生経験に裏付けされた考え方・行動が、一般の学生により影響を与えていたことは大いに予測される。社会人入学生にとっても若い学生の考え方・行動から学ぶことも多く、相互に刺激しあうことは、よりよい効果をもたらすと考えられる。

また、卒業後の継続教育においても、これらをふまえた関わりが、さらに社会人入学生の資質を伸ばし、他の看護スタッフにもよい学びを与えることが予測される。

4. 本研究の限界と今後の課題

今回検討したのは、30歳代と40歳代を1事例ずつで、しかも両者とも学習意欲が高く学習内容がよかった事例であった。この2事例のみで、社会人入学生全体の体験として言及することは当然不可解である。また、面接はそれぞれ1回ずつしか行っていない

いため、この2事例のみを深く掘り下げることができたわけでもない。今後、さらに焦点をしぼった面接を行い、今回分析した構造を確認、補強していく必要がある。

また、研究者の面接技術の未熟さや、分析の視点の偏りが存在することは否定できない。今後さらに訓練を重ね、対象の体験にできるだけ近づくことができるよう努力していきたいと考えている。

まとめ

1. 社会人入学した看護学生の体験の意味をあるがままにとらえ、明確化するという目的については、次の2点が明らかになった。

1) 社会人入学した2名の看護学生の体験に関する本質的な意味の単位は、《自己を生かしていくという目標》と《年齢・人生経験・性格に影響された体験》であり、それぞれ4要素、6要素で構成された。

2) 学びの姿勢が意欲的であった要因は、自己を生かしていくという目標にあった。また、学びの内容を深めていけた要因は、年齢・人生経験・性格に影響された体験にあった。

2. 社会人入学した看護学生の資質を生かし伸ばしていくための看護学教育のあり方については、次の1点が明らかになった。

1) 人生経験を生かせるという側面が、社会人入学生よりどころになっていると考えられた。その部分を肯定し、看護につなげて考え方を深めていくことが、社会人入学生にとっても一般の学生にとっても、教育的効果をより大きくすると考えられた。

文献

- 1) 藤田和夫：看護専修学校（3年過程）に社会人入学した学生の意識～17名のアンケート調査より、1993年看護基礎教育の課題，日本看護協会調査研究報告No.42，29-35，1993.
- 2) 杉森みどり他：看護基礎教育過程における学生の同一性形成に関わる経験の分析～臨床経験2年目の看護婦の面接調査から，千葉大学看護学部紀要，15（3），9-15，1993.
- 3) 広瀬寛子：看護学教育における集中的グループ体験のもつ教育的機能に関する研究—現象学的方法を用いて—，看護研究，23（5），57-67，1990.